
日本子ども社会学会 学会ニュース

第 12 号 (2005/11/01)

日本子ども社会学会事務局

〒261-8586 千葉県美浜区若葉 2 - 11 放送大学「発達と教育」専攻 住田正樹研究室 気付
TEL&FAX : 043 - 298 - 4131 E mail : jscs-edu@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp
U R L : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jscs2/>

目 次

第 13 回大会開催校について 1	理事会からのお知らせ 11
第 13 回大会開催校から 1	各種委員会からのお知らせ 11
第 12 回大会報告 2	事務局からのお知らせ 12
第 12 回大会総会報告 8	新入会員, 住所・所属等変更, 退会者 . . . 14

第 13 回大会開催校について

第 12 回大会の総会で承認された通り、第 13 回大会は東京成徳大学で行われることになりました。開催校の所在地、日程は下記の通りです。大会案内、大会事務局連絡先など、詳細は別途お知らせいたします。皆様のご参加、ご発表をお待ちしております。

開催校：東京成徳大学 (十条台キャンパス)
〒114-0033 東京都北区十条台 1-7-13
日 程：2006 年 7 月 1 日(土)、2 日(日)

第 13 回大会開催校から

東京成徳大学子ども学部学部長 深谷 昌志
第 13 回大会準備委員長 永井 聖二 (東京成徳大学)

日本子ども社会学会の次回大会を、7 月 1 日 (土) 2 日 (日) の両日、私どもの東京成徳大学十条台キャンパスで開催させていただきます。

十条台には、子ども学部があります。平成 17 年に開学した学部で、学生は 3 年生までしか在籍していませんが、人文学部や短期大学に籍を置く先生を含めると、学会に所属する先生は 14 名になります。都心の大学なので、キャンパスが狭く、何かとご不自由をおかけするかもしれませんが、埼京線で、池袋から 2 駅 5 分、新宿から 10 分。十条駅下車 7 分の交通の便の良い場所です。会員の先生方のご参加を心からお待ちしております。

第12回大会報告

1. 公開シンポジウム

子どもの生活世界に起こっている諸問題を考える

司 会：山縣 文治（大阪市立大学）
シンポジスト：津崎 哲郎（花園大学）
 廣井 亮一（和歌山大学）
 岩佐 嘉彦（弁護士）

本シンポジウムでは、子どもの生活世界で発生している諸問題、とりわけ社会的な関心事にまで高まっている子どもの虐待や少年事件などの最前線で仕事を続けてこられた方々に登場していただき、今現場で何が起こっているのか、それに対して、家庭、学校、地域社会などは何をすべきなのか、子ども自身はどう対処することができるのか、などを話し合った。

津崎氏は、さまざま起こっている問題に対して、児童相談所での児童福祉司の経験をもとに、それぞれの児童相談所に限らず、家庭裁判所、学校、地域社会などの機関などが、個別に抱え対処していくことの限界、多職種が一堂に会して話し合いをすることで、問題の見方や援助内容の幅が広がることを指摘した。

廣井氏は、家庭裁判所調査官の経験をもとに、少年非行が、子どもたちの社会的におかれている状況を如実に表すことをデータを活用して紹介した。また、家庭裁判所は、法的枠組みが最も確立した機関であり、その枠組みを全体とした援助のプラス面だけでなく、そのことからくる限界も指摘した。

岩佐氏は、学校においてもソーシャルワーク視点の援助システムが社会的に必要なが、一方でソーシャルワーカーの質を高めていかなければ、その効果も期待できないことが指摘された。

時間的制約があって、出席者との意見交換ができなかったことは残念であったが、シンポジスト間でのやりとりは活発に行われた。子ども社会学会に対する期待もいくつか指摘された。とりわけ、学際的な学会として、連携やネットワークに関する研究や実践への期待を伺わせる発言が多く聞かれ、学会としてこれを受け止めていく必要性を感じた。

（大阪市立大学 山縣文治）

2. ワークショップ

ワークショップ1

子どもの放課後を考える

- 学会調査をふまえて -

コーディネーター：住田 正樹（放送大学）
 パネリスト：上島 博（御所市葛城南小学校）
 岡崎 友典（放送大学）
 永井 聖二（東京成徳大学）

このワークショップは、2年にわたって実施してきた学会調査の結果を踏まえて、今日の子どもの放課後のあり方を考えてみようというものである。

上島氏は、学会調査の結果からみれば子どもたちの放課後のあり方は学校によって大きな違いがあるとした上で、放課後の全般的な子どもたちの生活状況、子どもの被害事件の影響、1日の子どもの生活事例調査について報告された。

岡崎氏は、子どもたちの放課後の生活を子どもの地域生活と捉えて地域社会の重要性、あるいは地

域の教育力の重要性を指摘された。しかし地域社会の概念は曖昧なままであり、そのために実証的研究は少なく、地域社会のあり方を明確に示すことはできない、そこで新たな共同性に注目するとし、地域住民組織や親同士の人間関係のあり方の重要性を指摘された。

永井氏は、学会調査では子どもの放課後の生活を子どもの外遊びと捉えているが、近年子どもの外遊びは大幅に減少している、そこで具体的な施策が必要であり、大人の現実的な働きかけが必要であるとした上で、学校が子どもの放課後の生活にもっとかかわるべきではないかと提案された。

この三氏の報告、提案を巡って、フロアからさまざまな質問・意見が出され、活発な論議が展開されたが、その結果は以下の3点にまとめられる。

第1は、子どもの時期の問題である。いったい子どもとはどの時期の子どもを指すのか。放課後の生活といっても子どもの時期によって大きく違うのではないかというわけである。言い換えれば放課後の生活が人間形成の過程で最も教育的な意味をもつのはいつ頃かというわけである。

第2に、子どもの生活を捉えるために調査方法上の工夫が必要ではないかという問題である。これまでは大方が子どもを対象とした質問紙法であったが、しかし子どもの意識や日常生活をさらに明らかにしていくためにはさまざまな調査方法が必要であろうし、また調査上の工夫も必要だというわけである。

第3に、子どもの外遊びの重要性は多々指摘されるが、理由はどうであれ、実際には外遊びは減少している、だから子どもを遊ばせるための条件をどう築いていくかということが問題となる。

(放送大学 住田正樹)

3. ラウンドテーブル

ラウンドテーブル1

紙芝居の過去・現在・未来

コーディネーター：堀田 穰(京都学園大学)

「手づくり紙芝居運動」の大きな拠点がある、大阪大会なので、紙芝居の歴史を、実物を見ながら、体験してもらおうという意図で、上演、制作者に集ってもらった。そのラインナップは以下の通り。

街頭紙芝居	実際に日本最後の街頭紙芝居貸元「三邑会」で修行をした辻太一氏 「たこやきまん」街頭紙芝居風続きもの 「かみしばいショートショート」
教育紙芝居	教育現場で紙芝居を活用しておられる八尾雅之氏 「しま口バくん」画・長野ヒデ子、作・中川ひろたか、童心社 「だいこんおろしととのさま」落語を手づくり紙芝居にしたもの
戦時紙芝居	戦争協力紙芝居を実際に上演して、タブー視しないという鈴木常勝氏 「オルスバン」南義郎・脚本・絵、日本教育紙芝居協会
手づくり紙芝居	箕面手づくり紙芝居コンクールや、制作講座で活躍する三本章代氏 「ぱんぱらぱらちゃん」 「今夜のおかず」日常から発想された抱腹絶倒の作品

さらに子どもの手づくり紙芝居作品も披露された。

その後は、上演者も交えて、13名の参加で紙芝居についての情報や、実践についての交流を行った。特に保育紙芝居による全学的なプロジェクトを企画して、紙芝居についての専門的な見識のある学会を探して、わざわざ本大会に参加して来られた名古屋柳城短期大学の鬘櫛久美子先生、図書館主任の種市淳子さんの参加は、実践者、研究者、所蔵機関実務者の交流を目指すという本ラウンドテーブルの意図にまさに沿ったもので、大変ありがたいものであった。上演協力、参加していただいた皆様にお礼を申し上げます。

(京都学園大学 堀田 穰)

ラウンドテーブル2

子守唄・わらべうたの伝承と普及に向けて

コーディネーター：鵜野 祐介（梅花女子大学）

話題提供者：山本 淳子（「わらべうたの会もも」主宰）
和歌山県岩出町「根来の子守唄」保存会

話題提供者に、「わらべうたの会もも」を主宰する山本淳子、「根来の子守唄保存会」会員真重みづ代・梶本洋子、「NPO法人日本子守唄協会」代表西館好子の各氏を迎え、鵜野がコーディネーターとなって開催された本ラウンドテーブルには、全員で15名の参加者があった。最初に参加者全員が自己紹介をした後、3組の話題提供者によるプレゼンテーションがあり、小休憩をはさんで後半では話題提供者に対する質疑応答や、テーマに関するいくつかの提言や課題が出された。

前半のプレゼンテーションでは、まず山本氏が「もも」の活動について、「親子が楽しいときを過ごすことができる場となること」を最優先しており、「母親がゆったりした気持ちになることが大切」と、具体的なわらべうたの歌唱をまじえて発表された。次に、「根来の子守唄」が10数年前より和歌山県岩出町の保存会によって「全国子守唄サミット」をはじめ全国各地で紹介され、CD発売もされており、また2006年には同サミットを同町で開催する予定であることが紹介された。そして西館氏は、子守唄を通して親子の絆を取り戻すことが今日何よりも大切であることを、教育現場、マスコミ・企業、政治などさまざまな立場から発言し行動を起こしていくことが緊急の課題であり、そのために日本子守唄協会は奔走していることを語られた。

後半の討論の中では、子守唄やわらべうたが繰り返し歌うのに適した内容をもつものであり、これがさまざまな機会や媒体を通じて日常的に、繰り返し子どもたちに体験されることが肝要との認識で一致した。とりわけ、口から耳へ、身体から身体への直接的な伝承が困難な今日の状況にあってなすべきことは、全国各地で行われている実践的な活動の情報交換を行えるようなネットワークづくりであることが確認された。

限られた時間のため消化不良の感は否めないが、和やかなひと時を持つことができた。

（梅花女子大学 鵜野祐介）

ラウンドテーブル3

子どものスポーツを巡る諸問題

コーディネーター：山本 清洋（鹿児島大学）

話題提供者：犬飼 義秀（岡山県立短大）

大野木 龍太郎（浜松学院大学）

清水 一巳（九州大学大学院）

司会：馬場 桂一郎（大阪信愛女学院）

現代の小・中学生を対象としたスポーツの現状を、1) 参与しているスポーツの特性、2) 子どもスポーツと大人の関係、3) 教育審議会議事録を基にしたスポーツの特性、4) スポーツ競技会と子どものスポーツ、5) 少子化現象とスポーツ等の視点から検討し、幾つかの課題と次年度のラウンドテーブルのあり方についてある方向を見出した。

検討内容を以下に示す。

- 1 現在の子どもが参与しているスポーツは子どもの特性を包摂し得ない構造をもつ。しかし、なぜ子どもは参与し続けるのか？
 - 2 組織化、コーチング、大会運営、価値形成等の領域で大人は子どもスポーツに介入しすぎている。
-

-
- 3 教育審議会の議事録から、大人の論理を基盤とした子どもスポーツの類型化でき、それを通して大人の子どものスポーツへの期待が分かる。
 - 4 競技力養成の文脈に子どものスポーツが位置づけられている。
 - 5 少子化現象によりスポーツへの参与の形態やスポーツ集団の構造に変化が見える。
 - 6 次年度は、競技力団体やマスメディアの領域が子どもスポーツを、如何なる哲学のもとで組織化し関わっているかを、当事者を招いて検討する。

(鹿児島大学 山本清洋)

ラウンドテーブル5

近代学校は集団と個の関係をどうとらえてきたか

- 逸脱児をめぐるある教師の実践をめぐる -

コーディネーター：小川 博久（聖徳大学）

司会者：小川 博久（聖徳大学）

話題提供者：木村 学（東京学芸大学
連合大学院）

杉山 哲司（日本女子大学）

神田 伸生（鶴見大学）

本庄 富美子（姫路市立荒川小学校）

岩田 遵子（東横学園女子短期大学）

指定討論者：中井 孝章（大阪市立大学）

このラウンドテーブルは、上述の表題をテーマとして二つの小学校教育の実践例（A,B）を対象に、“逸脱児”が学級の中で他児とどのような関係をつくっていったか、その際、担任教師の役割はこの関係にどのようなかわりを持っていったかを分析し、学級における集団と個の関係を討議、考察した。企画と司会を小川が担当し、最初の事例Aについては、木村が日常的教育活動の記録を報告し、神田が児童の作図とアンケートの分析を、杉山が逸脱児と他児達の遊びの運動軌跡を機械装置による分析によって報告した。また、もう一つの事例Bは、本庄教諭の実践報告と岩田による記録とインタビューの分析が報告され、それに対し、中井孝章の指定討論が加えられた。それは分析事例の分析方法に関するものであった。結果として、“逸脱児”としての教師や本人また他児達の共通の認知がいかにして相互に克服されるかという視点からの教師のコミュニケーションの実践が、個と集団の望ましい関係作りに有効であることが明らかにされた。しかし、そうした配慮をしない授業コミュニケーションで、教師の指示に対する子どもの応答性が教師の要求水準以下である場合、教師の否定的評価言が繰り返されればされるほど、クラスの間関係は成績による階層分離を生むことが明らかになった。事例Aでは、不登校やいじめを少なくするという努力を環境面では行っており、校庭に全面芝生を植えて、明日見時間に校庭で寝そべったり、座り込んでおしゃべりをしたりする姿があったり、ピオトープの周辺で子ども達が三々五々物探しをする姿が見られはしたものの、学級の集団やそこでの人間関係を改善することには、必ずしも貢献しているとは言えないという観察結果を得た。それに対して事例Bでは、短期間に“逸脱児”としてレッテルを貼られた子どもが、こうした評価を根本的に問い直す教師と子ども達との日常的コミュニケーションによって、クラスに溶け込んでいる姿を観察することができた。

(聖徳大学 小川博久)

ラウンドテーブル6

子ども社会学研究の理論と実践性

コーディネーター：原田 彰（呉大学）
望月 重信（明治学院大学）
話題提供者：原田 彰（呉大学）
望月 重信（明治学院大学）

本ラウンドテーブルのねらいは、子ども社会（研究）の可能性を探る 上で何がいま求められているか問いかけることにあった。参加の会員はあまり多くはなかったが、子ども社会研究の歴史的、今日的深さと課題は共有されたと確証している。

まず、原田彰氏は「子ども性」に注目する。「子どもであるとはどういうことか」を徹底して追究する。無力・未熟な存在、無垢・無邪気な存在、悪戯・ワル（悪）の子ども。原田氏はこの社会的観念の「裏」を析出して見せた。無力な子どもというのが「可愛さ」と結びつくと大人の心を動かす「力のある存在」としての子どもが立ち現われる、というように。

通常の観念を引っくりかえし、「子ども性」(無力・未熟) + 「子ども性」(悪戯・ワル)、「子ども性」(無力・未熟) + 「子ども性」(無垢・無邪気)、「子ども性」(悪戯・ワル) + 「子ども性」(無垢・無邪気)、「子ども性」 + 「子ども性」 + 「子ども性」。これらの組み合わせからいくつかの命題を抽出した。そして子ども = 無力な存在というのが同時に「無垢の力からワルの力まで、さまざまな力を示す存在」でもあるということができると述べた。

実証のみで子ども社会を照らしだす研究に限定せず、子ども社会の「原点」に回帰することから出発しようと主張する。原田氏は子ども性 にとくに注目している。「悪」の特性が「社会を解くカギ」と見る。

望月は、研究者が「子ども研究に着手する端緒」に拘る。そして、子ども自身の存在が「学際性を帯びた」存在と見る。子ども社会には独自の世界があると認めたいが一律に定義できない「もどかしさ」を提示した。また、他教育関連学会の子ども研究の特性 戦後世界と子ども研究、子ども向けの大人の「まなざし」の変容、子ども研究の方法について紹介し、子ども社会学研究の今後の研究方途について提起した。しかし各参加会員の子ども研究法や子ども研究成果の実践について時間の関係で十分な議論ができなかった。

最後に研究者の「子ども時代」や「原風景」について話題が出たことは子ども研究における「世代性」研究と「子供性」研究の可能性を示唆するものと思われた。

今後も続けて意見交換ができることを確認して和やかなうちに終わることができた。

（明治学院大学 望月重信）

ラウンドテーブル7

学級での協同学習と子どもの学習力（学ぶ力）・個性

コーディネーター：高旗 正人（中国学園大学）
南本 長穂（関西学院大学）
話題提供者：相原 次男（山口県立大学）
園田 雅春（甲子園短期大学）
中山 澄子（山口県周南市立和田小学校）
岡本 晴光（岡山市立吉備中学校）

本ラウンドテーブルの主旨は、第12回大会発表要旨集録（pp.167-169）に所収の通りである。約15名の参加者を得て、活発な議論が交わされた。

まず、コーディネーターの南本氏より「学級における協同学習の方法論を見直し、そこに学ぶ子どもたちの学習力(学ぶ力)・個性について議論を交わす」という趣旨説明がなされた。

次に相原氏からは、実践家と研究者から成る民間の教育研究団体「個を生かし集団を育てる学習研究協議会(個集研)」の、過去30年以上にわたる取り組みが紹介され、「学習の社会化」の視点から「個の形成と集団の形成が相即不離の関係にある」という認識から、特に社会学視点に拠る授業研究と、それを「協同」という概念の元に束ねることの重要性が指摘された。

園田氏は、「個を生かす」ことを「普遍性と独自性の総和」として捉えることを提案した。そのうえで、協同を通して培われる学力を「わかる力をためこみ、できる力をも育む、相手を納得させる力、役立てる力であり、他者をも肯定できる力」と定義し、これを成立させるために教師の力量形成をはかること、同時に教員養成教育の重要性を指摘した。

中山氏は、小学校校長としての立場から実践現場に即した話題提供を行った。社会の形成者を育成するには、ひとりひとりの子どもが学級の中に活躍する場面が必要であり、話し合い、考え合い、謙虚に人の話を受け入れる「学力」こそ、協同の学びを通して培われると指摘した。

岡本氏は、中学校校長としての立場から、生徒指導上の問題対応だけでは学校は変わらないこと、「自主協同学習」の方法論を採用した学校運営を進める中で、常に学校の現状を診断し、その結果を教師の力量形成に繋げることが、今後予想される教員評価にも対応しうると指摘した。

南本氏は、教育現場における「私事化の常態化」に警鐘を鳴らすとともに、協同(質的レベルでの多様化)と競争(量的レベルでの格差づくり)の方法論の相互作用から、個人を他者や集団に結びつける Social Bonds の回復が訴えられた。

以上の話題提供を踏まえ、参加者から活発な議論が交わされた後、高旗から、明治期「学制」以来、日本の授業・学校教育は、子どもたちを受け身の立場において競争させる学習集団づくりを続けていた。このあたりで、子どもたちが主体となって進める授業・学習集団づくりに転換すべきではないか。そのためには、協同学習論や協同教育の方法論的検討が有効であると考えられる、とのコメントがあった。

(島根大学 高旗浩志)

4. 第12回大会を終えて

第12回大会実行委員会委員長 山縣 文治

日本子ども社会学会第12回大会は、2005年6月25日(土)・26日(日)の2日間、会員約200人、非会員約50人の参加を得て無事開催することができました。

本大会は、教育系の大学以外での初めての大会ということで、その特性をいかした企画を組み込むことを検討して参りました。その成果は、「子どもの生活世界に起こっている諸問題を考える：児童虐待・少年事件・家事事件」と題する大会シンポジウムの企画です。この企画では、子どもの生活世界に起こっているさまざまな事件について、多角的な視点から検討することができたと思います(詳細は、別記事)。

本大会での会員による研究発表数は45、加えて、ワークショップ2、ラウンドテーブル7が企画されました。ラウンドテーブルという形で、会員や非会員との交流が促進されたことは、学会活動を社会的に広めていく、あるいは会員拡大につながるなどの点で、大きな意義があったものと思います。

本学は、学会会員数が多くなく、引き受けされていた段階では、少し不安もありましたが、事務局の温かい励ましと支援があり、大きなご迷惑をお掛けすることもなく、終えることができたこと、大変感謝しています。

第12回大会総会報告

1. 報告事項

(1) 2004年度事業報告

第11回大会の開催	2004年6月12日(土)～13日(日)	於：九州大学
理事会の開催	2004年6月11日(金)	於：福岡リーセントホテル会議室
常任理事会の開催	2004年12月4日(土)	於：龍谷大学 大宮学舎
	2005年3月26日(土)	於：キャンパスプラザ京都
評議会の開催	2004年6月12日(日)	於：九州大学
各種委員会の開催	2004年6月12日(日)	於：九州大学
紀要編集委員会の開催	2004年10月17日(日)	於：龍谷大学
	2004年11月28日(日)	於：明治学院大学
選挙管理委員会の開催	2005年2月19日(土)	理事選挙開票 於：龍谷大学 深草学舎
	2005年3月13日(日)	会長選挙開票 於：京都新阪急ホテル
研究交流委員会の開催	2005年6月24日(金)	於：大阪市立大学
事務局活動	2004年7月6日(火)	研究紀要 第10号発送
	2004年10月15日(金)	「学会ニュース」第11号発行
	2004年12月10日(金)	仮)選挙人、被選挙人名簿発送
	2005年1月28日(金)	第12回大会案内送付および 会員名簿(2004年12月)発行
	2005年2月4日(金)	平成17・18年度理事選挙 投票用紙発送
	2005年3月1日(火)	会長選挙投票用紙発送
	2005年3月22日(火)	第12回大会プログラム用広告の 掲載依頼発送
	2005年5月28日(土)	第12回大会プログラム発送
会員数(2005年5月31日現在)		
正会員	523名	
学生会員	90名	
賛助会員	2団体	
全会員数	615名	
2004年度学会費納入状況(2005年5月31日現在)		
正会員	523名中	385名(73.6%)
学生会員	90名中	77名(85.6%)
賛助会員	2団体中	0団体(0.0%)
全会員数	615名中	462名(75.1%)

- (2) 選挙管理委員会報告
 - (3) 紀要編集委員会報告
 - (4) 研究交流委員会報告
 - (5) メディア活用委員会報告
 - (6) 将来構想委員会報告
 - (7) 共同研究事業プロジェクト委員会報告
 - (8) その他
-

日本子ども社会学会 2004年度(2004.4.1～2005.3.31) 一般会計予算

< 収入の部 >

項目	収入	(内訳)
学会費(2004年度)	2,098,000	
正会員 7,000 × 282名		1,974,000
学生会員 4,000 × 26名		104,000
賛助会員 10,000 × 2団体		20,000
大会プログラム広告掲載料	200,000	
抜き刷り代	35,000	
紀要売上 2,000 × 100冊	200,000	
事務局費残金	2,769	
前年度繰越金	6,070,870	
一般会計収入合計	8,606,639	

< 支出の部 >

項目	支出	(内訳)
紀要刊行費(第10号)	1,200,000	
印刷費	623,200	
第11回大会プログラム印刷費		150,000
第12回大会案内・申込ハガキ印刷費		50,000
学会ニュース11号印刷費		50,000
名簿印刷費		150,000
選挙関係印刷費(含:選挙用封筒印刷費)		70,000
封筒印刷費		150,000
振り込み用紙印字代		3,200
通信費	705,000	
第11回大会プログラム発送費		150,000
第12回大会案内・申込ハガキ発送費		75,000
学会ニュース11号発送費		75,000
会員カード発送費		50,000
名簿発送費		85,000
紀要第10号発送費(含:図書館への発送)		70,000
理事会・各種委員会・会員通信費		200,000
事務用品費	80,000	
事務局員交通費(2人×5回)	266,000	
紀要編集事務費	150,000	
会議費(理事会など)	200,000	
選挙関係担当委員交通費(2回)	240,000	
学会奨励賞(楯、賞状)	50,000	
第11回大会シンポジウム謝金	50,000	
第12回大会補助	300,000	
事務局費	100,000	
研究活動費	550,000	
予備費	4,092,439	
一般会計支出合計	8,606,639	

学会費は、会員数の80%見込みで計算。但し、2004年度分学会費を前年度までに納入している会員を除く。既に2004年度の学会費を納入している会員数は、正会員126名、学生会員33名。

日本子ども社会学会 2004年度(2004.4.1～2005.3.31) 決算

< 収入の部 >

項目	収入	(内訳)
学会費(2004年度)	1,962,000	
正会員 7,000 × 256名		
学生会員 4,000 × 41名		
学会費(2005年度)	72,000	
正会員 7,000 × 10名		
学生会員 4,000 × 0名		
学会費(過年度)	399,000	
正会員 7,000 × 50名		
学生会員 4,000 × 10名		
大会プログラム広告掲載料(11)	195,390	
1頁(表紙) 24,000 × 2社		48,000
1頁(裏紙) 22,000 × 1社		22,000
1頁 20,000 × 1社		20,000
半頁 15,000 × 7社		105,390
抜き刷り代	7,000	
紀要売上 2,000 × 99冊	198,000	
事務局残金	2,769	
旧事務局口座閉鎖につき残金	67,968	
前年度繰越金	6,070,870	
紀要送料	11,830	
学術著作権協会	24,694	
出版者著作権協議会	24,000	
通帳利子	32	
一般会計収入合計	9,035,553	

< 支出の部 >

項目	支出	(内訳)
紀要刊行費(第10号)	893,025	
印刷費	398,200	
第11回大会プログラム印刷費		138,000
第12回大会案内・申込ハガキ印刷費		38,500
学会ニュース11号印刷費		39,000
名簿印刷費		168,000
選挙関係印刷費(含:選挙用封筒印刷費)		14,700
通信費	730,410	
第11回大会プログラム発送費		83,320
会員名簿・第12回大会案内・申込ハガキ発送費		118,600
学会ニュース11号・会員カード発送費		70,800
会員カード・投票用紙返信用切手代		96,000
選挙関連(仮名簿・投票用紙)発送費		136,320
紀要第10号発送費(含:図書館への発送)		40,800
事務局移転のための書類等送付		40,600
理事会・各種委員会・会員通信費		143,970
事務用品費	67,339	
事務局員交通費(2人×4回)	212,800	
紀要編集事務費	150,000	
会議費(理事会など)	180,324	
研究奨励賞(楯、賞状)	36,750	
選挙関係担当委員交通費(4人×2回)	178,200	
第11回大会シンポジウム謝金	50,000	
第12回大会補助	300,000	
事務局費	100,000	
研究活動費	550,000	
事務局費不足補填	17,426	
一般会計支出合計	3,864,474	

監査の結果、適正に執行されていることを確認いたしました。

監査 住岡 英毅
監査 村上 尚三郎

日本子ども社会学会 2005年度(2005.4.1～2006.3.31) 一般会計予算

<収入の部>

項目	収入	(内訳)
学会費(2005年度)	2,933,000	
正会員 7,000×391名		2,737,000
学生会員 4,000×44名		176,000
賛助会員 10,000×2団体		20,000
大会プログラム広告掲載料	189,000	
抜き刷り代	35,000	
紀要売上 2,000×100冊	200,000	
前年度繰越金	5,171,079	
一般会計収入合計	8,528,079	

<支出の部>

項目	支出	(内訳)
紀要刊行費(第11号)	1,000,000	
印刷費	453,200	
第12回大会プログラム印刷費		150,000
第13回大会案内・申込ハガキ印刷費		50,000
学会ニュース12号印刷費		50,000
封筒印刷費		200,000
振り込み用紙印字代		3,200
通信費	510,000	
第12回大会プログラム発送費		100,000
第13回大会案内・申込ハガキ発送費		80,000
学会ニュース12号発送費		80,000
紀要第11号発送費(含:図書館への発送)		50,000
事務局移転費		50,000
理事会・各種委員会・会員通信費		150,000
事務用品費	80,000	
事務局員交通費(2人×2回)	150,000	
紀要編集事務費	150,000	
会議費(理事会など)	190,000	
学会奨励賞(楯、賞状)	50,000	
第12回大会シンポジウム謝金	50,000	
第13回大会補助	300,000	
事務局費	100,000	
研究活動費	500,000	
予備費	4,994,879	
一般会計支出合計	8,528,079	

学会費は、会員数の73%見込みで計算。但し、2005年度分学会費を前年度までに納入している会員を除く。既に2005年度の学会費を納入している会員数は、正会員10名、学生会員0名。

理事会からのお知らせ

平成17年6月24日(金)および平成17年6月25日(土)の理事会におきまして以下の申し合わせを決めましたのでお知らせいたします。

ワークショップおよびラウンドテーブル等の発表資格・参加資格について

ワークショップおよびラウンドテーブル等の企画者・司会者・コーディネーター等の責任者は会員であることを要するが、発表者・報告者、また参加者は非会員でも可とする。

また非会員の発表者・報告者、参加者に対する『発表要旨集録』等の配付等については大会校に任せることとする(無料か有料か、また有料の場合の価格等)。

平成15・16年度紀要編集委員会からのお知らせ

紀要第11号に編集上のミスがありましたので、会員の皆さまに告知し、お手元の11号の下記の箇所を訂正いただきたく、よろしくお願い致します。投稿された雲津英子会員には、大変ご迷惑をおかけしました。深くお詫びすると共に、今後、このようなことが起らないように、校正の点検体制を強化したいと存じます。会員に配布済みですため、本会報で訂正の告知を申し上げます。

(平成15・16年度紀要編集委員会委員長 田中統治)

- 表紙、目次、奇数ページ上のタイトル
(誤)「現代日本」 (正)「近代日本」
- 125頁の英文要旨の氏名
(誤)「UMOZU」 (正)「KUMOZU」

17・18年度各種委員会からのお知らせ

将来構想委員会

平成17年6月26日に開催しました第1回の会議において、この2年間に検討すべき課題を協議しました。とくに、懸案となっています紀要編集委員への旅費支給の問題をはじめ、学会活動を活発にするため諸課題について、理事会から付託を受けました。委員をはじめ、会員の方々からも、提案をお寄せいただきたく、よろしくお願い致します。

(将来構想委員会委員長 田中統治)

研究刊行委員会

「子どもの放課後調査」は、平成15年の試行調査に続いて、平成16年に本調査を実施し、その成果は学会で発表されました。そして、社会的に大きな反響を得ました。貴重な資料ですが、古くなると資料的な価値が薄れますので、出版計画を急ぎました。これまで学会関係の出版を行ってくれた北大路書房が、今回も話に乗ってくれたので、「放課後の子どもたち」の形で、刊行を計画しました。プロジェクトに参加してくれた先生に執筆を依頼し、平成17年10月現在、ほとんどの原稿が集まっています。来年の学会開催時には、製本されて、ご覧いただけるはずと考えています。ただ、出版事情の厳しい中での刊行ですので、執筆者の先生は、印税3%、40冊買い取りの条件になっています。そうした事情の学会の研究プロジェクトの刊行ですので、会員の先生方にも、1冊でも、お買い求めいただきたいと、願っています。

(研究刊行委員会委員長 深谷昌志)

共同研究事業プロジェクト委員会

日本子ども社会学会/全国調査<子どもの放課後>は、会員の先生方のご協力ももちまして、平成17年1月に試行調査(全国16地点、小学5・6年生、3300名)と本調査を10月に(全国16地点、小学5.6年生2800名)実施し、6月の大会で無事発表することができました。なお、収集した資料をもとに、日本子ども社会学会セレクション5「放課後の子どもたち(仮題)」として、北大路書房から刊行いたします。来年の大会には刊行が間に合う予定です。現在、14名の執筆分担者のほとんどから原稿が集まったと聞いております。

今後子ども社会の現状について、本学会ならではの情報発信が継続できればと思っております。なお、次年度は「子どもと学校」のテーマで、ワーキンググループ(世話人:深谷昌志・須田康之)が準備作業に入っております。

ご協力ありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

(共同研究事業プロジェクト委員会委員長 深谷和子)

事務局からのお知らせ

(1) 学会費納入

本年度(平成17年度)の学会費未納の方は、郵便振替にてお納めください。学会費を滞納されますと会員資格が失われます。口座番号等は次のとおりです。なお、通信欄には必ず何年度の学会費かをご記入ください。

口座番号	01760-1-85048
加入者名	日本子ども社会学会

(2) 会費

平成 13 年度より会費が値上げされています。学会費振込みの際はご注意ください。

平成 12 年度以前	正会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、団体会員 10,000 円
平成 13 年度以降	正会員 7,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 10,000 円

(3) 学会入会手続き

本学会へ入会を希望される方は、学会事務局（住所は 1 頁参照）まで、切手を添付した返信用封筒を同封の上、ご連絡ください。事務局より入会案内書をお送りいたします。入会される場合、入会申込書に必要事項を記入の上（現学会員の推薦が必要）、会費を郵便振替にて納入してください。

(4) 住所・所属等の変更

住所、所属、電話番号等に変更があった場合、必ず学会事務局へお知らせください。これらの変更は『学会ニュース』にてお知らせいたします。また、退会される方も、必ず学会事務局へお知らせください。いずれの場合も、電話ではなく**葉書**や FAX、E-mail 等の書面にてお願いします。

(5) 献本

- 山田浩之 『マンガが語る教師像』昭和堂、2004
小木美代子・立柳聡・深作拓郎・星野一人編著 『子育て支援の創造』学文社、2005
桜井智恵子 『市民社会の家庭教育』信山社、2005
立田慶裕編 『教育研究ハンドブック』世界思想社、2005
深谷昌志 『子どもから大人になれない日本人』リヨン社、2005
湯地宏樹 『幼児のコンピューターゲーム遊びの潜在的教育機能』北大路書房、2005
『接続』刊行会編 『接続』Vol.4 ひつじ書房、2004
奥野友美編 『第 6 回野外伝承遊び国際大会報告書』社団法人青少年交友協会、2004
梅花女子大学大学院児童文学会 『梅花児童文学』第 13 号、2005
奥野友美編 『第 8 回野外伝承遊び国際会議報告書』社団法人青少年交友協会、2005
『アジア太平洋フォーラム・淡路会議 2004』、アジア太平洋フォーラム・淡路会議事務局、2005

- 事務局から -

事務局では『大会プログラム』に掲載する広告を募集しています。広告掲載を希望する出版社等をご存知でしたら、ご紹介ください。

〒261-8586 千葉市美浜区若葉 2 - 11
放送大学「発達と教育」専攻 住田正樹研究室 気付
TEL&FAX : 043 - 298 - 4131
E-mail : jscs-edu@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

新入会員 (略)

退会者 (略)

住所・所属等変更 (略)